



森と海からの手紙

★8便★

長野・信濃「アファンの森」の秋



信越県境に連なる妙高・黒姫・戸隠・飯縄の頂が、うすらら雪の冠をまとった10月下旬。長野県信濃町にある「アファンの森」では、秋の協奏曲が奏でられていた。

山に無駄なものはない



①自宅近くの森で、まき割りをする松木信義さん＝5月20日 ②初冠雪した黒姫山と妙高山＝10月25日、いずれも長野県信濃町で

「指南役」との再会

間の小道を歩くと、落葉がサクサクと調べを刻み、カツラの枯れ葉が甘い香りで包んでくれた。

森は今年も実りをもたらしたし、ナラやクリの木の下にはイノシシの食べかすと足跡が散在していた。スギ林では、リスが木肌をはいで口にくわえ、樹上の枝の間をこしらえた球形の巣にせっせと運び込んでいた。そして夕暮れには、発情期を迎えた雄鹿の物悲しい鳴き声が流れていた。

「アファンの森」と名付けて、森づくりを始めたのは1986年。35年の歳月を経て、1540種の動植物がすみ森になった。

その指南役となったのが、山仕事の達人の松木信義さん(86)だ。

黒姫の山麓で生まれた。少年時代は川でカジカ突きやイワナ釣りに興じ、クワやクリの実がおやつ代わりに使った。

小学生の頃から父親の山仕事を手伝い、中学を出ると単身山の中に泊まり込んで炭焼きを始めた。

「一人で炭焼きを始めて間もない頃だよ。夜中に、闇を引き裂くような叫び声が聞こえてき。『ギャー、ギャー』って、それは恐ろしいもんだ。里に下りた後にオヤジに聞いたら、『そりゃあ、フクロウだ』



「将だな」と思っていたら、『森』へ入りするから、やぶ掃除をしてくれ』って頼まれてさ」

「ニック(ニッさんの愛称)とは、最初から気が合ったな。気さくで、何でも知りたがり屋でね。信濃町の中には85種類もの木があっけき、俺が数えたから間違いないよ。ニックが知ってたのはナラだけだったけどな。どんどん覚えていったよ」

松木さんにとっては「山が学校」であり、生まれつきの好奇心から何でも知りたかった。

「この木は何に使える、根っこはどうなってる、これは食えるんか、とかさ。あんまりうるさく聞くもんだから、『そんなこと知ってても、カネになんねえぞ』って笑われた。だけど、俺は山が好きだから知ってるのさ。損得で生きてるわけじゃねえ」

長じて、「山のことばは松木さんに聞け」と言われる存在となり、50歳を過ぎてニッさんと出会った。

「形がいい木や大きい木を残して、あとは切り払えばいいもんじゃねえ。草や木のそれぞれの役割や世代交代を考えると、その場に合ったものを残してい

「森には、無駄なものなんかねえんだよ。一見なんでもないように見えても、それぞれに使い道というものがある。水に強いクリの木は家の土台に、油分の多いオニグルミは戸溝に使われる。なのに、在来の木々を伐採して、成長の早いスギやヒノキに変えちゃった。目先のもうけに走ったら、いずれしっぺ返しを食らうんでねえか」

松木さんは、東日本大震災の起きた2011年に引退。自宅近くの森の中に小さな小屋を建て、木の手入れやまき割りを続けてい

「亡くなる1年ほど前にニッくに会ったら、えらく痩せてるから驚いたさ。酒の飲み過ぎがたたったのかなあ。まあ、俺も遠からず、ニックのいる所に行くから、向こうに行ったら、また男2人でいっぱいおしゃべりでもするか」

森の小屋でストーブを囲んで、「お茶っこ」しながら、松木さんは言った。

「猫友会で出会ったんじやねえかな。『でっけえ大』」

【委員編集委員・萩尾信也】
原則毎月第3火曜掲載